〈鳥海山麓だより７〉

隣の女の子

鈴木京子

まだ雪の残る三月から種をまいて苗を育て、田植えの準備をしながら畑に植え付け、住民運動会を抜け出してまで芽かきに追われ、暑さに耐えてタマ落としと皿敷きをした。十日程休んで「いよいよ来週から出荷だぞ」という七月二〇日過ぎ、ケイコさんから電話が来た。

「もっけだどものぉ（申し訳ないけれども）、なんだか仕事にならねみでだ。昨日までは何でもなかったんども、今日見たら三分の一は葉っぱも実も黄色くなっでしまってのぉ。これだば出荷できねもんのぉ。もっけだぁ……」

長く続いた雨ですっかり弱ってしまったメロンは、その後の猛暑を耐えることができなかった。翌日、生き残ったメロンを数個「仕事がなくなったお詫び」だと言って届けてくれたケイコさんから、残りも日を追うごとに黄色くなって、一二〇〇本がほぼ全滅したと聞いた。

ケイコさんちは、コメと畑の収入がほぼ半々の専業農家だ。今年は春先の大根も、雨不足で去年の半分しか出荷できなかった。「お天気のすることだから、しょうがねっ」と、ケイコさんは痛々しく笑ってみせた。

しかし、それでは「産業」としての競争には勝てない。だから、ヨーロッパの大生産地は野菜も花卉（かき）も屋内での水耕栽培が主流だ。日照も害虫もコントロールでき、収穫物を人力でエッチラオッチラ運ぶ必要もない。数量も行き先もバーコードで管理されてクレーンが積み込み、無人のレールの上をコンテナが整列する。

日本でも消費者の「有機」志向の高まりによって、この「野菜工場」は増加しており、東日本大震災で津波による塩害を受けた地域の〝復興策〟としても注目を浴びている。だけど、それでいいのかね？

うちから八〇メートルほど離れたお隣には、小学校低学年の女の子がひとりいる。酪農を営む一家で、じっちゃんとばっちゃん、それにお父さんとはよく顔を合わせるし話もするのだが、お母さんらしき人に会ったことがない。もう六年間も、女の子が五歳くらいの頃からずっと。

ある日、その女の子が家の前の道路で、三〇代後半の女性と絡み合うように遊んでいた。あれがお母さんなんだな、なんで普段は見かけないのかな……。少し下品な好奇心をそのままにできず、同じ部落のノリコさんと焼き鳥屋で一緒になったとき、つい聞いてしまった。

ノリコさんによると、女の子のお母さんは韓国人で、あの家にとっては二人目の「嫁さん」だという。一人目は中国人で二年くらい居たらしいが、年に三ヵ月間の里帰りの後、帰って来なかった。そして、女の子のお母さんがやってきた。彼女もまた、年に三ヵ月くらい、韓国に帰るらしい。ん？　見かけないのは三ヵ月どころじゃないよ。

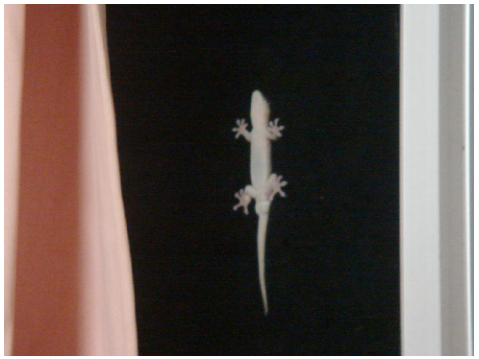
「東京で働いてんだと。国に送るカネがいるんでねが？　で、たまに帰ってくると、子どもが恋しがって恋しがって離れなぐで、たいへんなんだど。んだよのぉ、子どもだってさみしいよのぉ。んども、あのヨメさん、東京に行ぐようになって、すっかり垢抜けてきれいになったって評判だっけぇ」

六〇歳前後の息子とその両親が営む酪農という家族農業に、彼女は必要とされないのか。あるいは、彼女が東京で働くことは家族農業で得るよりもたくさん稼げるのか。なぜ、そのカネが必要なのか。そうすることを、彼女が希望したのか、家族が望んだのか。聞いてみたいけど、けっして聞けないナ。

女の子は今後、母を、父を、祖父母を、そしてこの家族の〝事情〟をどのように理解し、受け止めていくのだろう。

ミツバチの塊：この巨大な松かさは女王様を取り巻くミツバチの塊。４日間くらいこの状態だったが、女王様が飛び出すとみな一斉に後をついて行ってしまった。どこかのメロン畑からの脱走ミツバチ

メロン苗：ケイコさんちではハウスと露地を合わせ、約 2000 本のメロン苗をつくる



ヤモリ：毎年、夏になると、毎晩７時半過ぎに居間のサッシに現れる。去年と同じヤツなのかな？　今年は大小３匹を一緒に見たので、家族が増えている？

着果完了：雌花にミツバチが頭から突っ込むと、ほぼ100％着果完了！　この状態のミツバチは密を吸うのに夢中で、人が作業していて葉っぱがガサガサ揺れても気にしない

Photo : Suzuki Kyoko